

東京YMCA

2019年

3

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

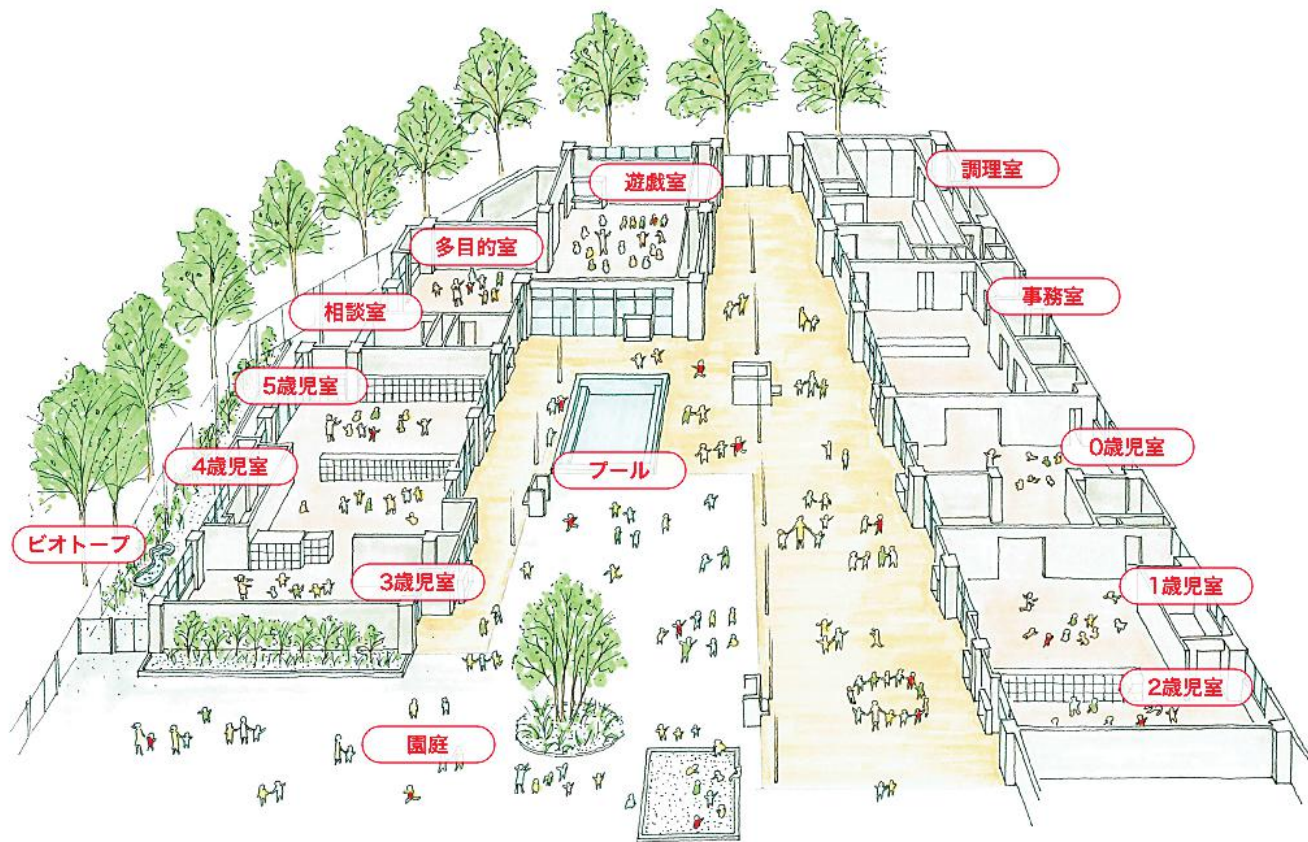
認可保育所

世田谷区船橋に 7月オープン

(予定)

YMCA 保育園ねがい

「チャイルドケアセンター」は3月末閉園



緑豊かな園庭が見渡せて、異年齢交流もできるなど、園舎にはさまざまな工夫をこらしています。詳細はホームページで
<https://www.tokyoymca.org/childcare/negai/>



ありがとう「チャイルドケアセンター」

(通称：ハーモニー)

チャイルドケアセンター 室長 宮内絹子

1998年に開園した「YMCAチャイルドケアセンター」は、自由が丘駅から徒歩5分。美容院とスイーツのお店が立ち並び、およそ保育園があるとは思えないお洒落な街にあります。ドアを開ければ一目で見渡せる狭いスペースで20年間保育を進めてきました。0歳～2歳児20人の、全員が家族のような保育室です。子どもたちからは「ハーモニー」と呼ばれ親しまれてきました。

開園当初は子どもの泣き声、散歩車の置き方などで近所からお叱りを受けたと聞いています。月日が経ち近隣の商店街のお子さんやお孫さんをお預かりするようになると、だんだんハーモニーへのまなざしが優しくなり、見守っていただいていることを実感するようになりました。狭い道路に歩行者用のグリーンラインができたり、散歩に出かける時に必ず渡らなければいけない道路に横断歩道ができたのは、商店街の皆さまのおかげです。境内で「♪主イエスとともに～」と大合唱する子どもたちを暖かく迎えて下さった九品仏浄真寺の方々にも感謝の気持ちでいっぱいです。保護者の方々の熱い信頼と地域の方々の優しさに支えられ、ここまで歩んできてことができました。

毎年、「小学校に行くまでずっとハーモニーで過ごしたい」と保護者の方々からご要望をいただいていたが、ついにその「ねがい」が実現します。石田恵 初代室長が丁寧に植えた種が芽を出し、高橋里香 前室長が大切に育ててきたハーモニー。場所が変わり、土が変わっても大丈夫。根っこは長く大きく張っているはず。きっと世田谷区船橋の地にしっかりと根付くことでしょう。

「YMCA 保育園ねがい」

園長 高橋 里香

世田谷区船橋に今年7月、「YMCA 保育園ねがい」が誕生します。東京YMCAが運営する3つ目の認可保育所です。定員は0歳から就学前児まで79人。千歳船橋駅北側の「希望ヶ丘」と呼ばれる緑豊かな住宅街で、既存の「世田谷区立希望ヶ丘保育園」の園舎をリニューアルして開園します。

園の名前は、希望ヶ丘の「希」の「ねがう」「ねがい望む」という意味から付けました。子どもたちのねがい、保護者、職員、保育園に集うみんなの「ねがい」が集まり、それぞれの「ねがい」を認め合える保育園にしたいと思っています。現在リニューアル工事中の在リニューアル工事中の

い、同じく世田谷区内にある公認保育室「YMCAチャイルドケアセンター」は3月末で閉園します。1998年の開設から20年余、0歳から2歳児まで定員20人の小さな保育室として親しまれてきましたが、「YMCA 保育園ねがい」として生まれ変わることにしました。

このチャイルドケアセンターはもとより、東京YMCAの「FOCUS 21プロジェクト」のチームが子育ての課題を調査・検討していく中で誕生した保育室でした。低年齢児を受け入れる保育園の不足や子育てへの不安など、さまざまなニーズにこたえるために作られたのです。最初は大変だったと聞いていますが、地域の方にご支援ご協力をいただきました。中でも10周年を機に始めた「親子のハーモニーコンサート」は、地域の皆さまの協力の賜物です。石田恵元室長の「子育て中の親子に本物の音楽を聴く機会を作りたい」という思いに共感して、卒園児保護者でピアノの泉博子さんが協力くださり、また大勢の保護者が実行委員を務め、さらに30軒を越す近隣店舗が協賛してくださって、来場者500人を超す規模のコンサートを開催して開園を祝いました。ありがとうございます。

今後はこのチャイルドケアセンターでの経験をともに、みんなの「ねがい」を実現していきたいと思っています。開園予定の7月以降近くにお越しの際は、東京YMCAの新しい認可保育園を見学いらしてください。お待ちしています。

赤△三角

阪神淡路大震災から24年が経ちました。東日本大震災からは8年経ちました。今年も阪神や淡路の各所で、そして東日本

で、あの日をおぼえる催しが行われています▼神戸出身の私には、今も「1995年1月17日5時46分」が特別な数字となっていて心に刻み込まれています。最初の10年間のこの日の時刻、私はいつも胸の動悸を押さへながら、眠れずに過ごしました。11年目からつき物が落ちたように、眠れるようになったことを憶えています。しかし東日本大震災がおきてからはまたその時を不安な心を抱えて過ごすようになりました▼大きな災害が起きると、家族、愛する人、コミュニティの暖かな繋がりがたくさん引き裂かれます。そしてその悲しみは、24年や8年では乗り越えられないとも学びました▼でも、乗り越えられなくても、あるがままに悲しみに身を委ねたり、新しい温かい人と人の繋がりを、人と自然、人と神様のつながりを、一つ一つ愚直に丁寧に積み重ねていくことも大切だと感じ始めたこの頃です。YMCAも思直に丁寧に、そばに寄り添ったり、小さな素敵な体験を積み重ねるお手伝いを続けていきます。(山中湖センター 佐久間眞人)

会員協議会「ソシアス2018」

「10年後のYMCA」を語りあう

年に一度、会員と職員が集まってYMCAの課題について語り合う会

を2月11日、東陽町センターで開催しました。昨



分団協議では、会員増強への具体策や、人材養成の計画、新規プログラム案など、たくさんの提案が並びました。



年の「ソシアス2017」は、より親睦を深めることを重視してバーベキューなどを行いました。今年では会員部運営委員会等で検討を重ねた結果、会員・職員がそれぞれの思いを率直に語り合い、その意見を今後の東京YMCAの運営方針に生かしていきたいとの願いから、『10年後のYMCAを語ろう』をテーマとし、パネルディスカッションと分団協議を行いました。

この発題を受け、40名の参加者は約90分に分団協議を行いました。どの分団も話がつきること

なく終了の時間を迎え、その後、模造紙に書き出した話し合いの要点が発表され、全員で共有することができました。

分団の後は遅めの昼食を共にしながら、参加者一人ひとりの自己紹介をしたりと親睦を深める時を持ち、「YMCAの歌」で閉会を迎えました。

4時間半の開催時間が短く感じるくらい内容の濃い時を過ごすことができました。若手からベテラン会員まで、お互いの距離がぐっと短く感じられた「ソシアス2018」となりました。

（会員部主任主事 中里敦

東日本YMCAスタッフ研修

8年目の福島で 支援の心を学ぶ

「第14回東日本地区YMCAスタッフ研修会」が1月23日、24日に福島で開催され、北海道から山梨まで28名が参加。原発事故から

まもなく8年が経つ福島を視察し、今なお苦しんでいる被災地の人々にどのような寄り添うことができるのか、キリスト教の理解を深めながら学びました。

初日の視察では、南相馬市、浪江町を訪問し、原発事故に対して問題意識を持つて活動される方などから直接お話を伺いました。2日目は視察を振り返りつつYMCAの使命について金迅野牧師（マインノリテイ宣教センター・在日大韓基督教会横須賀教会）から学び

ました。金牧師は、「私たちは自分中心の社会にどっぷり浸かり、人の命を軽んじてきたのではないか。軽んじること、それは無関心ということではないか」「シンパシーという言葉には、共感、共振のほかにも、痛みを共有する。分かち合う」という意味がある。寄り添うことを考える時に、この言葉の意味をかみしめたい」と話されました。研修を通し「寄り添う」ことについて多くを学ぶ機会となりました。

（本部事務局長 山添仰）

＜参加スタッフの感想から＞

●芝浦学童クラブ 上原 永可

『復興』とは何か。判らなくなった。「ここから先はバスの窓を閉めて下さい」とガイドの方に言われ、車内から見た「帰還困難区域」は、植物の絡んだ建物や道がそこにあるだけだった。手渡された線量計の数値が上がっていき、私は正直気が気ではなかった。それでもその付近では大型トラックが行き来し資材が運ばれ、人が立ち働いて、人の力で「復興」が進んでいる。しかし、どんなに工事が進んでも「二度と帰ってはこれないとみんな解っている」。訪ねた先で聞いたこの言葉が突き刺さった。「3.11のあの日、多くの人が大切なものへ思いを馳せ無事を祈り、心に何かトゲのようなものが刺さった」のだという。その何かは私の中に刺さっているか。心に食い込んでいるか。無関心になっていないか。問い続けて無関心をなくすこと、「復興」はその先にあるのだろうか。

●社会体育・保育専門学校 佐藤 基文

今回の研修で、福島の実状を改めて知ることができました。私は2011年夏からスタートした福島のご家族のための「リフレッシュキャンプ」にキャンプディレクターとして参加をし、震災支援に取り組んできました。約4年間で50回を超えるキャンプを実施し、延べ2000名の方々と触れ合えたことは、私にとっても大きな経験でした。一つひとつがとても大切なキャンプだったことを覚えています。今回の研修では、南相馬、小高、双葉、大熊、浪江と様々な地域を回り、生の声を聴いて、現状を知りました。今も支援を必要としている場所は数多くありました。現地を訪れて、触れて、忘れないこと。それが支援の心につながると思います。私も引き続き、支援の心を持続けたいと思いました。参加をさせていただき本当に感謝しています。

新ワイズメンズクラブ誕生

～町田に笑顔の輪を～

「東京町田スマイリング ワイズメンズクラブ」

バナー（ワイズ旗）も笑顔の広がりイメージして作られた



町田地域に新しく「東京町田スマイリングワイズメンズクラブ」が誕生し、『国際協会加盟認証状伝達式（チャーターナイト）』が2月24日、玉川学園さくらんぼホールで行なわれました。

ワイズメンズクラブは、YMCAを通じて奉仕活動をする国際的な団体です。町田にはすでに90年代から活動している「東京まちだワイズメンズクラブ」と「東京コスモスワイズメンズクラブ」

がありますが、会員の増強と"若返り"のためには、既存のクラブに仲間を誘うよりも新しい発想で新クラブを作った方がいいと、2年前からさまざまなクラブが協力して準備にあたり、設立されました。「スマイリング」には、スマイルが輪（Ring）のように広がってほしいとの願いがこめられています。

メンバーは地元の実業家など11人。若い新しいクラブですが、ご支援ご協力をお願いします。（担当主事 諏訪治邦）

シリーズ 資料室の窓から(104)

母子保護法の背景

本会元副総主事 齊藤 實



当時の東京YMCA機関紙。毎月30数頁にわたり、活動報告や論文などが掲載された。

今から80年ほど前の話である。1936年2月26日、陸軍皇道派将校が所謂「二・二六事件」を起こして軍部は発言力行を高めた。翌1937年、7月7日に日中戦争に入つたこの国「日本帝国」は、続く8月の24日に閣議で国民精神総動員実施要綱を決定して国民生活を戦時体制に組み込んだ。1938年4月1日、政府は「国家総動員法」を公布して、国民経済・生活を官僚統制下に置いた。

こうした日本帝国施策の流れに関わる基本的な課題が人口問題であった。その頃日本の人口増加は毎年100万人ほどであったが日中戦争の影響もあつてか、30万人に落ち込んだ。人口減は戦争を遂行する帝国を脅かす事態であった。その対処の一端が日中戦争勃発直前の1937年3月31日に公布した「母子保護法」であつた。生活困窮者への公的扶助的側面があつたにせよ、『子は国の宝』と叫び、長期戦に備える「望ましい国民の構え」を明示したのである。子どもは「健民」として育たねばならず「健兵」となるべき存在であつた。時局が推移する中で、1939年9月には、内務省から分離発足後2年目の厚生省は「結婚十訓」を発表した。《一生の伴侶として信頼できる人を選びませ

う》に始まるその第十訓は《産めよ殖やせよ国のため》であつた。露骨な提言である。こうした時代の空気を伝える十分なページ数を持つ東京YMCA機関誌『東京青年』は、時代の気配を先取りしてか1935年1月号で「座談会・結婚準備工作」に2ページを当てた。同年2月号の「夫婦共稼ぎの座談会」では、「共稼ぎ賛否両論ありたるも、子どもがない中なら賛成できるも、子供を持ったなら、家庭の人となつてほしい。」と記録した。こうして、機関誌・紙は、時代の空気を的確に伝え続ける。今は、何を書き残すべきか。